身の始末　私流

内川光枝

この年になると、いよいよ我が身の始末をつけたいと思う。思わざるを得ないのだが、なかなか明確整然という訳にはいかない。次々と生活雑用品は増えていき、選択意志はあっても、バランスよく仕分け作業するには時間も体力も、そう、肝心の判断能力すらも自分の意のままに迅速的確に働いてはくれない。

そうか、ならば辺りが片付かないままの中で暮しつつ、せめて物以外のことにケリをつけていこうかと考え直してみることにした。まず、このまま死んでしまってはいけない事について。その分類もいくつかに分かれる。一番先に取り掛かることは何にしよう。

そうだ、まず人に謝ることからだ。謝らなければいけないことは沢山あり、人であったり物であったり、その他大いなる見えない世界のことであったりするが、まず人に対して。自覚している事、していないが想定できる事、ことの重大さの順位、謝りたい気持ちの大小、相手の年齢、性格、状況等を考える。と、手紙では間に合わないと感じる事もあり、いてもたってもいられない。早くしないと伝えられないままになってしまうではないか。こう切羽詰まるまでに長い年月が経っていたことに驚愕する。

今まで自分は何故気づかなかったのか、何もしないで来た訳ではない。それなりに事に当たり、目標を設定し、より良い方向へ策を練り、実施してみて修正を繰り返し、苦しくても常に挑戦することで、やる気を駆り立ててくるだけの生き方はしてきたではないか。いやいや、その、つまり、生き方という捉えを大局的に見ていなかったという事ではないか。そうだ、独断ではなく、周りの人の思いや意見をリサーチし、共に協力し合いながら今よりは更に充実した状況を作り、共有して、それぞれの暮らしをより満足できるものに作り変えていこうとはしていた。

が、それはしかし、集中し努力していたからといって、自分の価値を位置付けて言い訳してはいけない。今まで星の数ほどある事象の中、他の星のささやきに気づいたことがあったろうか。外を吹く風の匂いに心乱されることがあっただろうか。自分の立ち位置が大局の中で正しく確認できていたはずはない。

そうだ、ことの大小ではない。ことの大小は当たり前のこと。自分の専門外で、逃げるしかない分野のことだ。情報を得て知ればいい。そうだ、情報を得て知ることを

軽視していたのかもしれないよ。自分には手に負えない分野のこととして。自分には直接関われない、関わらなくても困らないと独断したのではないか、そうだよね、自分なんてちっぽけな存在だもの。だけど、自分は限りある身だけれど、何考えるか分からない不気味なものだけど、胸の中に、犯してはならない聖なる基地があるってことは感じている。そうだ、必ず誰彼なく万人が持っている基地だ。その基地は、自ら発信するし、大いなる外からの発信も受ける機能を持っている。その基地は必ずある。神かもしれない。人間が神の存在を求め、勝手に神をつくっているのかもしれない。だが、そう思い、考える事は神には出来ないだろう。この不完全極まりない人間にしか思いつくことが出来ない作業なのではないかと。基地はある、あるとして、その存在、働きを自覚することは万人にあるだろうか。いや「ある」と信じることが狂気なのか、「ある」と願うのが正気なのか、とまれ、自分の中にある、自分を超える神聖な存在、その存在の声を聞かずして、私は、この狭苦しい自分が、大いなる世界と手をつなぎ、ものごとの価値、しくみを正しく知り、生きる意味が分かって納得する暮らしを作る事は出来ないと感じた。自他、そして大いなる神（？）も公認する生き方とは？

そして私は身震いした。恐れ多くも、人は神を作れるのではないかと。神のもと、人は畏敬し、感謝して生かされてこの世にある。あの世に行ってもそうかもしれない。人は思うことが出来る。神は思うことがあり得るのか。無から、全てのことを把握し、成し遂げ納めておられるようにみえる。それを感じておられるのか。私は神を崇める位置にある。が、この胸の中に、あるような、あってほしい神は、自身が夢みて願っている人が作り出した思いの化身ではないのか。

思いあがっているのではない。が、言論自由な現時代、思っている事、考えてみたい事、夢やら苦しみやら、安心な場に放出してみたい。どの道、何を言動しても神ではないのだから、もともと、不完全な生き物なのだから許されてもいいのではないだろうか。人は常に今よりは向上していきたい。上を向いて前に向かって意欲を駆り立てて生きていくことを喜び、その喜びをエネルギーとして暮していく。意欲が駆り立てられるような環境づくりをこそ、お互いに意識して努めることが人間の務めかもしれない。

そう思った時、目の前が明るく啓けた。何々？　では、まず、謝るべきは謝り、感謝すべきは感謝することに、気付いて実行することから始めようと考えるってことで

良い訳かしら。外の世界の風の声に気付き、自身の胸の中を覗いてみてそう感じたなら、それで正解なんじゃあない？　よし、その方向に向かって動こう。勝手な自分の忙しさにかまけて外の息遣いに気付かなかった過去。大切な友人が悲しい状況に陥った時、私に気配を察知する余裕が無く、長い間、打ち明けることをためらわせてしまったこと。可愛い飼い犬が夜遅く帰る私の車の音を聞きつけて、「お帰りー」を言おうと、クサリのひもをぎりぎりいっぱい伸ばして鳴いて呼ぶ声に、笑顔も見せず追われるように家に入ってしまったこと等々、必要とされた時に喜ばれる行動が出来なかった悔やみが残る。「ごめんねー、あの時はごめんねー。大好きだよー、コローっ、コローっ」、今はもういない犬の名前を呼ぼう、人に電話をかけよう、手紙しよう、ハガキでもいい、会いに行こう。手を取り合って分かり合おう。「ありがとう」と「ごめんなさい」を言い合おう。そして神様に向かって頭を下げ、「おかげさまです」と手を合わせたい。